

関西学院のプラント

関西学院大学建築学部准教授・建築学部ヴォーリズ研究センター研究員

谷口 真紀

偶然にも、関西学院大学図書館で借りた *The Omi Brotherhood in Nippon* が著者直筆のサイン本だった。同書は、1934年にミッシヨナリー・アーキテクト（キリスト教伝道者で建築家）のウィリアム・メレル・ヴォーリズが関西学院第4代院長のコーネリアス・ジョン・ライトホール・ベーツに贈った署名本であった。1929年竣工の学院の西宮キャンパスの設計者と施主の間柄を越えて、その後もふたりが親交を重ねたことがうかがえる。

ヴォーリズが手がけたキャンパス・デザインの要は、やはり時計台の建物だろう。当初は図書館だった。正門から中央芝生、図書館、甲山へと軸線が通る。「山べにむかいてわれ目をあぐ」の讚美歌 301 番が思い起こされる。また、軸線を挟んで左右に学問棟が並び、双方を結ぶように図書館が配置されている。専門と教養を統合して実践に資せよと、校訓「Mastery for Service」を提唱したベーツの声が喚起される。

キャンパスのレイアウトをめぐるにはこんなふう語られてきた。しかし、上記はあくまで建物の鑑賞者側の解釈だという点を再確認しておきたい。ヴォーリズは西宮のキャンパス設計に関してまとまった文章を残していないから、そうした解釈が彼の意図通りだという確証は得られない。ただ、それは、設計者のコンセプトを使い手が解釈できる余地を彼があえて残したのだと言い換えられる。彼は自らの背後にある大なるものをわきまえ、建築に取り組んでいた。学生・職員・教員の成長の器となる教育施設を建てるという務めをいったん果たしたら、あれこれ口出しせず、使い手に、最終的には神に、建物を託したのだろう。

1905年に来日したヴォーリズは、高等学校で英語の先生として社会人のスタートを切った。以来、教育についてのビジョンを養う。学びをいつときではなく生涯にわたる営みと見なし、学んだことを発揮して世の中に奉仕した副産物が学びの成果なのだと日頃から考えていた。

そうした展望にもとづいて設計したキャンパス完工にあたり、「関西学院の施設 (plant)」は「未来を見据えたキャンパス・レイアウト」になっていると、英語で一言だけ寄せた (1929年5月20日付『関西学院新聞』)。

ヴォーリズの意味は、先ほどとは逆向きに軸線をたどると、さらに際立つかもしれない。ちょうど手元に、そうしたアプローチで撮影された写真がある (写真)。1939年の学院50周年記念誌の最後のページに掲載された写真は、両脇に学問棟が控える図書館から中央芝生、正門、西宮の町を臨むものだ。そのように視線をやるとどうだろう。キャンパスに向かうだけでなく、キャンパスから世界を見やってみて、やるべきことに着手せよと、スクール・モットーが鮮明に浮かび上がってくるようだ。信仰をともしにするベーツとヴォーリズのキリスト教に根ざす教育理念が共鳴しているように感じられる。この方向からキャンパス・レイアウトが解釈されることはあまりなかったと思に至る。

学院に集うひとりひとは、時計台がシンボルの図書館から世界に向かって伸びゆく草花 (plant) でもあると、ヴォーリズは図面にヒントを忍ばせた。私たちは彼と対話を重ね、建物の価値を自ら発見していくよう委ねられている。実に、それ自体も教育だ。学院の記憶を継承する図書館で引き当てた献本をめくりながら、そんなことを考えた。

(たにぐち まき)



時計台 (旧図書館) より正門を望む

i 主要な解釈については以下を参照のこと。田淵結「関西学院とヴォーリズ」『関西学院史紀要』第23号、2017年、19-20頁。田淵結 (監修)『ヴォーリズのかたち』展:改訂版 関西学院大学、2004年、25頁。関西学院百年史編纂事業委員会『関西学院百年史:通史編I』学校法人関西学院、1997年、448-450頁。
ii William, Merrell, Vories. "Let No Man Despise Thy Youth." *Colorado College Publication*. General Series 177 (Studies Series 9) (1931). 13. コロラド・カレッジ・スペシャル・コレクション所蔵 [Colorado College Information File (CCIF) Alumni - Bio - Vories, W. Merrell 1904 (Hitotsuyanagi)].
iii 同前、15頁。